

ポツダム・ベルリン留学体験記

斉藤恵太

はじめに

私が博士号の取得をめざしてドイツ留学を開始したのは 2009 年の冬学期のことです。それから 1 年ほど経った頃、『クリオ』編集部から留学体験記の執筆依頼を頂きました。ただ、ドイツ留学、とりわけ博士論文を書くことについては、既に本誌で一連の体験記が書かれています¹。それを私自身もいわば手引きとしてきたのですから、今さら他に参考になることなど書けるだろうかと、少しためらいもしました。その意味で、以下に記した私の体験は、どちらかというとな個人的で瑣末なことが多いかもしれません。しかし、留学当初は小さなことの処理にもずいぶん苦労し、色々な人に意見や助けを求めた記憶があります。私はまだ留学の折り返し地点にも立っていませんが、そうしたことの積み重ねのなかで得られたものは今後も生きていくだろうし、これから留学する人と共有できるところもあるかもしれません。そう考え、今までのことを留学の準備から振り返ってみました。

留学準備

留学を実現するためにはまず資金を工面する必要があります。この点でドイツ留学は比較的恵まれていて、DAAD（ドイツ学術交流会）の奨学生になれば、毎月の生活費だけでなく航空費や保険料なども得ることができます。ただし、そのためにはまず留学先を決め、現地の指導教授とコンタクトをとらねばなりません。応募にあたっては指導教授の受け入れ承諾書が必須となるからです。留学先の選び方についてはやはりいろいろな考え方があると思いますが、私の場合はバイエルンの軍隊についてポツダムの大学で学び、しかもベルリンに住んでいるのですから、やや変則的といっているかもしれません。今のところこの選択は間違っていなかったと思いますが、その経緯を説明することで留学先の決め方について一つの例を示したいと思います。

私の博士論文のテーマは三十年戦争期のバイエルン軍です。近世ヨーロッパの軍隊は、一般的にこの時期までいわゆる傭兵隊長に運営が一任されてきました。しかし三十年戦争の過程で、君主たちは様々な手段を通じて軍事力を統制しようとするようになります。こうした変化の具体相を解明することが博士論文の目標の一つです。またバイエルンを対象として選んだのは、これまでの研究においてバイエルン軍は君主による統制が著しかったとされてきた一方で、その実態は明らかにされてこなかったからです。

こうした問題関心に基づいて留学先を考えたとき、二つの選択肢が浮かび上がりました。ミュンヘンとポツダムです。これまでの研究から、ミュンヘンのバイエルン州立中央文書館（Bayerisches Hauptstaatsarchiv）には私のテーマに関連する史料の多くが所蔵されているとわかっていましたし、ミュンヘン大学には近世史の大家シュルツェ（Winfried Schulze）がいます。他方でポツダムには、ドイツで唯一、歴史学の枠組みで

¹森田直子「ドイツ留学記—ビーレフェルトの一冬（2001-2002年）」『クリオ』16号（2002年）；同「ドイツにおける博士号取得の回顧と展望」『クリオ』21号（2007年）。

ポツダム・ベルリン留学体験記

軍事史の講座を持つ大学があり、これまでドイツの「新しい軍事史」を牽引してきたクレーナー (Bernhard R. Kroener) とプレーヴェ (Ralf Pröve) の二人が揃っています。とくにクレーナーは 17 世紀フランスの軍事行政に関する論文で博士号を取得し、三十年戦争期のドイツの軍隊に関するいくつかの先駆的な論文を発表しています²。

この二つの選択肢から留学先を決めるにあたって、私は DAAD の募集が始まる前に、史料調査を兼ねて両方の都市を訪れることにしました。それは私にとって初めてのヨーロッパ渡航でもありましたが、幸いどちらの都市にも先輩やその同僚の方がいたため、旅の助けを得られただけでなく、研究環境についても話を聞くことができました。その際に得られた情報を踏まえたうえで最終的に選んだのは、上述のようにポツダムです。

勘案したのは主に以下の点でした。まずミュンヘン大学に関しては、想定される指導教授のシュルツェがちょうど定年退職を迎える時期で、後任も決まっていませんでした。他方、ポツダムでは、クレーナーとプレーヴェという、いわば大御所と中堅がまだ第一線で研究と教育活動を担っています。現地でクレーナーと会うことはできませんでしたが、急きょ話を聞いてくれたプレーヴェはとても気さくな人で、ここで学びたいと思わせる魅力を持つ先生でした。たしかに、史料の面ではポツダムが不利かもしれませんが、しかし事前調査を通じて、ミュンヘンにある主要な史料の大半はマイクロメディア化されており、比較的容易にコピーを入手できることがわかりました。また、住むことになる都市の環境も重要です。ポツダムとミュンヘンはいずれも物価が高く、とくに家賃の高さはドイツで有数といえます。しかし、ポツダム大学はベルリンから通える距離にあり、実際、学生の多くは家賃の安いベルリンに住んでいるということでした。後述するように、私は結果的に妻とともに渡独することになったため、ベルリンの物価の安さには大いに助けられることになります。

留学先を決めてからは、クレーナーと改めてコンタクトをとって自分の問題関心や研究計画を書面で伝え、指導の承諾書を得ました。DAAD の奨学制度には、大別して学位取得を目的にするものと調査滞在との二種類があります。基本的に前者は毎年更新手続きをする条件付きで 3 年、後者は同様に 2 年の受給期間で、私が応募したのは前者でした。ただし、そうした DAAD の制度的枠組みを受け入れ先の教授が理解しているとは限らないので、承諾書に博士論文の指導教授となることが明記してあるか、十分に確認した方が無難です。学位取得の枠組みで DAAD に採用されたにもかかわらず、いざ留学してみたら指導教授にはその意志が伝わっておらず、博士候補生として正式に受け入れられるまで苦労した、という話を聞かせてくれた先輩もいますから。

受け入れ承諾書を得てからは、応募書類を用意したり、それとは別に日本語の論文を準備しているうちにあっという間に時間が過ぎました。論文に関していえば結局、渡独前に投稿までこぎつけられず、その後も尾を引くことになりましたが、ともあれ DAAD

²ポツダム大学の軍事史・暴力の文化史 (Militärsgeschichte/ Kulturgeschichte der Gewalt) 講座とその業績については以下を参照。阪口修平「近世ドイツ軍事史研究の現況」『史学雑誌』110号 (2001年)、84~103頁; R・プレーヴェ (丸島宏太・鈴木直志訳) 『19世紀ドイツの軍隊・国家・社会』創元社、2010年; B. R. Kroener, *Kriegerische Gewalt und militärische Präsenz in der Neuzeit*, hrsg. v. R. Pröve/B. Thoß, Paderborn 2008.

の奨学金を得ることはできました。そして 2009 年の冬学期から、クレーナーを指導教授としてポツダム大学での留学を開始することになります。

サンスーシの憂鬱

ポツダム大学歴史学科のキャンパスはサンスーシ公園 (Park Sanssouci) の西のはずれにあります。これはいうまでもなく、プロイセン王家の宮殿がある広大な敷地で、大学の建物はその中でも新宮殿 (Neue Palais) の裏手にあたります。この校舎自体、元々は王宮の維持運営にあたる召使たちが宿舎や炊事場として使っていた歴史的建造物ですから、歴史を学ぶ場としてはうってつけかもしれません。その中に居をかまえる軍事史講座は、正教授のクレーナーをトップに、員外教授のプレーヴェ、秘書、助手たちによって構成されています。一般的に員外教授や助手は期限付きのポストですが、プレーヴェの場合は例外的に無期限で、とくにゼミやコロキウムなど教育の現場を切り盛りしているのは彼とっていいでしょう。

クレーナーやプレーヴェと最初にした面談では、今後の研究計画を改めて説明したうえで、どの授業に出席すべきか相談しました。その際にすすめられたのは、隔週で開かれる公開のコロキウムと毎週のゼミナール、そして軍事史・軍事社会学概論です。後の二つは基本的に修士課程の学生を対象とした授業でしたが、ドイツの大学に慣れるためのいい訓練になりました。ちなみにポツダム大学で歴史を学ぶ学生は、学部で古代から現代まで一般的に学んだ後、修士課程から近世、近現代、軍事、教職のどれかに特化します。とはいえ、ここでは社会学や政治学といった隣接領域と連携した教育プログラムが提供されており、専門性とならんで学際性が重視されています。

さて、いざ大学に通い始めてみると、プレーヴェがテンポのいい話や機知に富んだやり取りで学生に親しまれていることがすぐにわかりました。実際、「軍事史」という名称が一見与える印象とは対照的に、講座の雰囲気はかなりくだけていて、教授たちの人柄について学生やスタッフに聞くと決まって「気さく locker」という答えが返ってきます。また意外という点では、この講座で助手などを務めるスタッフの過半数は女性です。あるいはこのあたりにも旧来の軍事史との違いが表れているのかもしれませんが³。

授業では学期末に課されるレポートや試験と並んでグループワークやディスカッションが重視されます。そのため、学生たちはプレーヴェや他の学生の話聞きながら、ペンや指を挙げて積極的に発言の意思を示し、名前を呼ばれると発言していきます。ところが私はそのなかで、予想はしていたことなのですが、ドイツ語で交わされる活発な議論にまったくついていけません。黙っている学生がいるとプレーヴェは発言しやすいように話を振ってくるのですが、そもそも今、何について議論されているのかもよくわからないのです。私が「ええと Also」などと言っているうちに、プレーヴェがことを察して他の学生を指す、などということは日常茶飯事でした。これはなかなか滅入ります。修士課程の二つの授業は火曜日の早朝から昼にかけて連続のコマでしたが、その間いつ話を振られるかわからないため本当に疲れました。

³従来の軍事史と「新しい軍事史」については前掲の文献と同様に以下を参照。阪口修平・丸島宏太編著『軍隊』(近代ヨーロッパの探究 12) ミネルヴァ書房、2009年。

ポツダム・ベルリン留学体験記

これに比べると隔週水曜のコロキウムは多少気が楽でした。ここでは報告者が決まっているので、いくらか落ち着いて話を聞けるからです。また私にとってこのコロキウムのメリットは、ドイツ人が報告の際にどのように議論を組み立て、プレゼンテーションをするか学べることと、自分の研究の進捗状況を相対化できることにあります。報告者の多くは博士論文を準備中の院生ですが、公開なのでポツダム大学の外からも募られてきます。また「軍事史のための新しい研究 *Neuere Forschungen zur Militärgeschichte*」と銘打たれているものの、軍事と関わりのないテーマが扱われることも少なくありません。発表時間はおよそ 50 分。その後はプレーヴェを司会にディスカッションが続きます。ここでも相変わらずドイツ語に苦戦しましたが、博士候補生やゲストの教授たちが交わす議論は当然ながら修士のそれよりもレベルが高く、論理的なために比較的理解しやすいことに気がついて、少しほっとしたりもしました。またポストコロキウムと呼ばれる授業後の飲み会は、先生や他の院生と交流する貴重な機会でもあります。研究室の院生や学生が知り合ったり情報交換したりする「たまり場」は基本的にありませんから。

これらの授業でプレーヴェと定期的に顔を会わせる一方、クレーナーとも面談を重ねました。面談にあたって私は今でも原稿を用意し、場合によってはあらかじめ目を通してもらいます。最終的には全て口頭でやり取りできるようになるのが理想かもしれませんが、原稿を用意することの利点は、それ自体が作文の訓練となり、また語学力不足による誤解を比較的避け易いことにあります。私の報告が一通り終わると、今度はクレーナーが、掘り下げるに値するトピックやそれに関連する文献・史料についてコメントしていきます。前述のように彼自身は 17 世紀のフランス軍に関して博士論文を書いていますから、いつもフランスの事例と比較しながら話を進めるのがなかなか刺激的です。ただ、ドイツ語もおぼつかないのにフランス語まで交えて話をされるとお手上げになるのも事実で、同じことを何度も言い直してもらうことが少なくありません。

このように悪戦苦闘しながら冬学期が進むにつれ、日照時間は日を追うごとに短くなり、気温もみるみる下がっていきました。そのうえ 2009 年はヨーロッパが記録的な寒波に襲われた年でもありました。これが悪名高い北ドイツの冬かと、妙に納得したものです。火曜の授業は朝の 8 時からだったので、ベルリンの自宅を出るのは 6 時過ぎです。まだ外が暗いうちから、言葉がわからない授業へと向かう電車の中はなるほど憂鬱で、「パーク・サンスーシ」の車内放送が皮肉に聞こえました。もっとも、留学当初のこうした暗い体験談は先例に事欠きませんから、その意味で想定の内でもあります。まして私の場合、もともと語学に不安があったので、大変なのは当たり前です。そう考えられるようになってからは、いくらか気が楽になりました。そしてこうした気持ちの変化は、研究以外の生活面で少しずつ余裕が生まれてきたこととも密接に関連しています。少し個人的な話になりますが、以下ではこの点について触れてみましょう。

プレントラウアーベルクの生活

生活の基盤となるのはいうまでもなく住居です。これに関しては恵まれていました。初めてポツダムとベルリンを訪れた際に手助けしてくれた先輩が、ちょうど私と入れ替わりで帰国することになったため、後釜として入居することができたのです。この住居

はベルリン北東部のプレントラウアーベルクに位置し、19世紀から20世紀初頭に建てられたいわゆるアルトバウ (Altbau) にあたります。戦災を比較的免れたこの地域には、そうした趣ある建物が少なくありません。ただ我が家に関していえば、もともと低所得層向けに作られたヒンターホーフ (Hinterhof=通りに面さない裏屋) なので、日照と通風に難があり、換気を忘れるとすぐに空気が淀んでいきます。そうした事情を十分に理解していなかった私たちは、厳冬のためについ換気を怠り、咳が止まらなくなるというトラブルに見舞われました。ともあれ、前の住人が子連れの三人家族で住んでいたくらいなので、私と妻が二人で暮らすには十分な広さです。

配偶者や子供がいる場合、DAADからは住居手当に加えて家族手当が出ます。とはいえ3年の受給期間内に博士論文を書き上げられる保証はなく、前例もあまり聞いたことがありませんから、できるだけ貯蓄しておいた方が無難です。そこで、留学からひと月ほど経ち、生活費の感覚がある程度つかめてきた頃、私は大雑把にむこう4年分の予算案を立てました。そしてそれをもとに家具等を揃えていきます。食器のように最低限必要なものは既に前の住人から譲り受けていましたが、その他の家具や雑貨に関しても、ベルリンは比較的日本人が多く、入れ替わりも激しいので助かります。友人や知り合いが帰国する際に不要な物を引き取ることで、大抵の物は調達できるからです。それらを家に運ぶにあたっては一人より二人の方が有利なことはいうまでもありません。

妻は私より少し遅れてドイツに到着したのち、3カ月ほど語学学校に通いました。私と同様、外国暮らしなどしたことがなく、そもそもドイツに関心があったわけでもないので、ドイツ語は渡独前に始めたばかりです。そのうえ電車賃を節約するため、冬のマイナス気温のなかを毎日徒歩で三十分近くかけて学校へ行っていたのですから、心身ともに楽ではなかったはずですが、家では私も多少の家事をしますが、特に食事面で妻の支援が得られることにはやはり感謝せねばなりません。ただしビザの関係上、留学生の妻がアルバイト等の就労活動をすることは禁じられています。

ビザの取得や住民登録、インターネット回線の接続などの雑務処理は、ふりかえってみれば些細なことにも思えますが、まだ何もかもがおぼつかない時期にはそれなりの大仕事です。とくにビザは長期滞在そのものに関わりますから。ベルリン自由大学のように大学が取得手続きを代行してくれる場合もありますが、ポツダム大学の留学生がベルリンに住む場合は、直接ベルリンの外国人局を訪れて申請しなければなりません。上述の先輩はその際、担当者がベルリン市とブランデンブルク州⁴の提携関係を理解していなかったため、居住地と大学の所在地が異なることを理由に申請を却下され、取得するまでにずいぶん苦労したようです。幸い、私たちは円滑にビザを得ることができましたが、役所に限らず窓口の担当者が誤った理解を押し通そうとすることは珍しくありません。その場で粘り強く説得しても埒が明かない場合は、やはりドイツ人の友人に力を貸してもらるのが最も迅速かつ確かなようです。

こうした極端な例以外にも生活と研究の両面で広く助けとなってくれるのが、いわゆるタンドムパートナーです。ベルリンの自由大学やフンボルト大学には日本学科があるため、日本について学ぶ機会を求めている学生は少なくありません。また日本学科こそ

⁴ポツダムはブランデンブルク州の州都にあたる。

ポツダム・ベルリン留学体験記

ないものの、後述するようにポツダム大学にも同じような関心を持つ学生はいます。知り合いや大学の掲示板を通じてそうしたドイツ人の学生とコンタクトをとり、語学を中心に互いの文化を学ぶというのがタンデムです。これを私は週に一回、妻は週に二回ほど、それぞれ別のパートナーと行ってきました。どの程度生産的なものになるかは相性によるところも大きいようですが、タンデムの利点の一つは、ネイティブチェックと呼ばれる作文添削から生活面での助言まで、互惠関係のなかで比較的気軽にものを頼めるところにあります。また、語学学校を終えた妻にとっては、定期的にドイツ語を話す貴重な機会でもあります。ベルリンには安価で雰囲気の良いカフェがたくさんありますから、会う場所には困りません。

もっとも、研究発表のようにある程度専門性を要する事柄に関しては、やはりドイツ史を専攻し、ある程度経験を積んだ人の手助けが必要になってきます。その場合は同じ軍事史講座の院生やスタッフが重要な意味を持つことはいうまでもありません。ただ、そうした同僚たちとのコミュニケーションに関して、私は当初ポストコロキウムの存在すらわからなかったくらいなので、順調な出だしだったとはいえません。大きな転機となったのは、2010年に日本で開かれたシンポジウムでした。

研究発表と同僚たち

2010年3月、東京で国際シンポジウム「新しい軍事史」の課題と方法—ヨーロッパ・アジア・日本」が開かれました。ここにはドイツから、プロイセン枢密文書館館長のクロースターフース (Jürgen Kloosterhuis) と並んでプレーヴェが招かれ、ワークショップでは院生のシュトラウス (Angela Strauß) とカルメン・ヴィンケル (Carmen Winkel) も研究発表をしました。それに先立つ2009年の年末頃、私は当のポツダム大学に留学中ということから、シュトラウスとヴィンケルの原稿和訳の依頼を頂きます。実際のところその時まで他の院生との交流があまり進んでいなかった私にとって、これは願ってもない機会でした。私は二人の原稿を受け取るとさっそく和訳に取りかかり、説明が欲しいところはメールで問い合わせたり、本人たちと直接会って聞いたりしました。今にして思うと、コンマの打ち方や語順など、ドイツ人からすればかなり瑣末なミスについてもいちいち質問してくる日本人を相手に、二人の院生はよく嫌な顔一つせず丁寧に応じてくれたものです。またその傍ら、プレーヴェは渡航前に私たち夫婦とシュトラウス、ヴィンケルを一緒に食事に招いてくれたりしました。

こうして日独シンポジウムを機に、少しずつですが大学の同僚との交流が増えていきます。印象的だったのは、ドイツに戻ってからシュトラウスが日本での世話（といっても観光に付き添っただけですが）に対するお礼とあって、私たちを自宅に招いてくれた時のことです。駅まで迎えに来てくれた彼女は、この時初めて親称の du で話すことを提案します。というのも留学当初、私は念のために誰と話す時も最初は敬称の Sie で会話をしてきました。一般的に学生や院生同士は知り合ったときから気軽に du で呼び合いますが、コロキウムには私からすると身分も年齢もよくわからない人が大学の内外から来ますから。それでも大抵の場合は、すぐに相手の方から du で話すよう促してきます。ところが私とシュトラウスはこの日まで半年近く、Sie のままで会話をしていたの

でした。その意味で、シュトラウスは本人も言うように少し古風なところがあるのかもしれませんが。ともあれ、du で話すようになってからというもの、彼女とはお互いの家が比較的近いこともあって、いわば家族ぐるみの付き合いになりました。偶然とはいえ、私にタンデムパートナーを紹介してくれたのもシュトラウスです。軍事史講座の助手を務める彼女は学生と接する機会が多く、たまたま日本に関心を持つ学生を見つけてくれたのでした。そして私が 2010 年の秋にポツダム大学のコロキウムで研究発表した際にもずいぶんと助けられることになります。

3 月に一時帰国する直前にクレーナーとした面談で、私は博士論文について 10 月のコロキウムで報告をすることになりました。そのため、ドイツに戻ってから当面はこの発表が具体的な目標となります。私はそれまでコロキウムに参加してきたなかで、発表では史料の細かな分析というよりは研究史上の位置づけや問題設定、史料の性質を示すことが求められていると感じていたので、先行研究を改めて整理し、どういった視点が欠けていて、何が新たに可能なのかを確認していく作業を始めました。

しかし、未だに面談での会話もおぼつかないのに、果たして研究発表の場で議論などできるのでしょうか。語学面での不安は当然つきまといます。そこでちょうど良い練習になったのが、7月にベルリンの日独センター（Japanisch- Deutsches Zentrum Berlin）で開かれたセミナーでした。これは日独韓の DAAD の奨学生を参加者として毎年開かれ、自分の研究を紹介したり、他の奨学生の活動を知るための場となっています。資金だけでなくこうした機会を得られることもまた DAAD の利点の一つといえるでしょう。発表時間は 20 分なので、大学のコロキウムの半分ほどです。そこでの私の発表は、基本的に今までの成果の中から他分野の人にも興味を持ってもらえそうな部分を原稿にまとめて読み上げたのですが、ドイツ語で発表に臨んだこと自体が初めてだったので、度胸をつける訓練にはなりました。

大学が夏休みに入った後も、後述する旅行を挟んでコロキウムの準備を続けました。ドイツの大学のコロキウムでは、私が知る限り、日本の大学のゼミや研究会のように発表者がレジュメを作って配ることはあまりありません。その代わりにパワーポイントを使う人もいれば、ひたすら口頭で発表する人もいます。私の場合は自分用の原稿を用意したうえで、要所をパワーポイントで補うことにしました。またネイティブチェックにあたっては、二つの段階を想定しました。一つは文法や文章表現の添削で、もう一つは全体の構成や議論の進め方など、もう少し踏み込んだものです。日独センターでの発表の時はタンデムパートナーに文章表現を見てもらうだけで手一杯でしたが、今回は同僚の意見も聞いてみたいと思いました。

第一段階で力になってもらったのは、やはりタンデムパートナーです。週に一回のタンデムを締め切りと考え、節ごとに原稿を書き進めました。書き上がった節についてタンデムの時に話し合い、修正を加えていきます。こうして、コロキウムの一週間ほど前にはとりあえず原稿とパワーポイントの雛型ができあがりました。これを今度はシュトラウスに読んでもらいます。私がコロキウムで発表することは彼女も当然知っていますから、以前から助けになると言ってくれていました。軍事史講座の現場の要にいる彼女は極めて多忙な身なので、多少気が引けますが、そうも言っていないで、原稿を渡

ポツダム・ベルリン留学体験記

すと、彼女は期待通り、言葉使いだけでなく、私が気が付いていなかった議論の穴なども丁寧に指摘し、コメントを加えてくれました。また彼女がかなり早くこの仕事をこなしてくれたおかげで、コロキウムの前日には予行演習をする時間がとれました。ただし、その際に力を借りたのは近所に住む別の同僚です。自転車ですぐの距離にある彼の自宅で、パワーポイントを操作しながら原稿を読み上げ、文章についても最後の調整をしました。

友人たちのこうした度重なる協力のおかげで、2010年冬学期の初回のコロキウムで無事に研究発表を終えることができました。肝心のクレーナーが公用のため出席できなくなってしまったのは残念でしたが、プレーヴェや他の出席者からは多くのアドバイスを得られました。またコロキウムの後、普段あまり話したことのない学生が寄ってきて「よかった」と言ってくれたのは嬉しいことでした。不安だったドイツ語の受け答えを満足にできたとは思いませんし、そもそも褒められているうちは外国からの「お客さん」なのかもしれません。それでもとりあえずこの日は達成感に浸りました。

10月にコロキウムでの発表を終えると、私は渡独前にやり残したままだった投稿論文に再び取りかかります。またクレーナーとも改めて個人的に会い、今後の計画について相談しました。私はここでの助言を受けて、それまではどちらかというと闇雲に目を通してきた史料に体系的に取り組むよう意識し始めます。それまでは手稿文書を読むこと自体が一つの訓練になっていましたが、コロキウムの発表を通じて博士論文の枠組みや構成がおぼろげながら見えてきたからです。ただし、問題意識のうえでこのように変化が起こると、手元にある史料がそれとそぐわなかったり、不十分であったりしてきます。おそらく今後も何度か繰り返すのですが、そうした場合は文書館へ史料収集に出かけなければなりません。

文書館と旅行

前述のように私の場合は居住地と史料の所在地が一致しないので、調査旅行は留学の中で重要な位置を占めます。とはいえ、バイエルン州立中央文書館ではオンライン化が進行中で、かつては現地に行かなければ見られなかった軍事行政関連の史料も、今では詳細な目録がネット上で閲覧できるようになりました⁵。どの史料がどういった問題を扱っているのか、ここからかなりの情報をえられますから、入手すべき史料をあらかじめ選定しておき、文書館では確認だけして一気にマイクロフィッシュの複製を注文します。デジタル化を依頼するとコストが数倍になってしまいますから、文書館では頼みません。ベルリン・フンボルト大学の図書館にはマイクロフィッシュをPDFデータとして保存する装置があり、今のところは無料で使えるので、多少の手間はかかりますがそちらを利用しています。

もちろん、史料が未整理な場合は文書館で綿密な調査をする必要が出てきます。例えばコロキウムの準備をしていた頃、私は文献を読み進めるなかで、とある古い論文に行

⁵この点に関しては以前に文書館体験記を本誌に寄稿した時と少し状況が変わっている。齊藤恵太「三十年戦争研究のための史料と文書館—バイエルンの軍隊を例に」。『クリオ』24号(2010年)、96~98頁。

き当たりました⁶。それによれば、1843年の秋、ハンス・クリストフ・フォン・リュップという名の人物に関する書簡や証書がバイエルン南部のブランネンブルクで大量に発見されたといえます。リュップは三十年戦争中にバイエルンの軍事行政の中樞を担った人物ですから、それらは私にとって極めて重要な史料となりえます。しかし、史料が発見されてまもなく書かれた記述なので、そこには史料番号などの所蔵情報は書かれていません。プレーヴェに言わせれば「探偵のように」現地で史料の在り処をつきとめていかねばなりません。そこで私は、手元にある情報をもとに文書館員と相談を重ね、可能性のある目録やカードにひたすら目を通していきました。結局、記述に書かれていた史料は現在までに州立中央文書館と州立文書館（Staatsarchiv München）のいくつかの書庫に分散していることわかりましたが、大半を発見することができました。その中でも、リュップが「汚職」の廉で訴えられた際に書いた長文の弁明書を見つけた時などは興奮を覚えたものです。今度はクリーナーの言葉を借りるならば、「宝箱を開ける瞬間のよう」でした。

もっとも、入念に準備したつもりでも、いつもうまくいくとは限りません。例えば5日間の日程でウィーンの国立文書館を訪れた時のことです。調査対象はハプスブルクの枢密参議会の議事録と軍事書簡でした。この時も事前にホームページを調べたうえで文書館員と連絡をとり、議事録を4冊ほどあらかじめ用意してもらいました。ところが、バイエルン州立中央文書館に慣れてしまっていた私は、マイクロ化されていない史料がとるスペースのことをすっかり忘れていました。索引を使いながら最初の2日間で目を通した大部の議事録を、「後でまた見るかもしれない」と棚にキープしたまま他に大量の史料を注文したのです。しかし、一度に自分の棚にキープできる量には上限があります。冊子であれば箱であれば、史料は1人につき6つまでしかキープできないと翌日になって初めて気づいたり、軍事書簡は担当者の「体調不良」のため普段より時間がかかったり、日程の後半は「史料待ち」の時間ができてしまいました。仕方がないので、その間に軍事史博物館を訪れたり、初日から別行動をしていた妻と合流して、もともと予定になかった市内観光をしたりしました。

さて、ウィーンで観光をすることになったのは偶発的で不本意なものでしたが、せっかくヨーロッパに長期滞在しているのですから、その間にドイツ内外を旅行することも大切かもしれません。この点で私自身はどちらかというと消極的なので、もし妻がいなかったらせいぜいミュンヘンかウィーンあたりで、ホテルと文書館を往復して旅行した気になっていたと思います。実際には、妻が留学同伴にあたって提示した条件が夏に南欧旅行をすることだったので、2010年には2週間ほどかけてイタリアとスペインを周りまわりました。また、日本の指導教授が折よくイギリスで開いてくれたセミナーにも参加することになります。これらの旅行は財政的な負担であることは否めませんが、いざ行ってみると得られたものも決して少なくありませんでした。私の場合、軍事史に関心を持つきっかけがいわゆる軍事革命論でしたから、「イタリア式築城」と呼ばれる建造物

⁶S. Dachauer, Geschichte der Freiherrn und Grafen von Ruepp auf Falkenstein, Bachhausen, Merlbach und Aschheim, in: Oberbayerisches Archiv für vaterländische Geschichte, 6 (1845), S. 113-138, 279-304, 307-322.

を発祥の地で見られたのは刺激的な体験でした⁷。それに何しろドイツの寒くて暗い冬を経験した後です。アルプス以北の人々が南欧に対して持つ憧れの一端を理解した気がしました。ケインブリッジで開かれたセミナーでは、日本の指導教授やヨーロッパ留学中の同僚たちと久しぶりに再会し、近況を交換しました。文書館に通い詰める時間は確かにかけがえのないものですが、こうした旅行や旅先の出会いもまた、留学をより充実したものにしてくれるように今では思います。

おわりに

3月も半ばになると日照時間がすっかり延び、通りに面したカフェでは表にテーブルを置くようになりました。考えてみれば、東京で生まれ育った私が「春の喜び」というものを心から感じるようになったのもドイツに来てからのことです。ミュンヘンとウィーンでの文書館調査を終え、私は再びベルリンで史料と文献に向き合う生活に戻りました。

そんな折、日本から二つの知らせが来ました。一つは、留学当初から後ろ髪を引かれる思いでいた日本語の投稿論文がようやく正式に採用されたというものです。この論文は準備と執筆にずいぶん時間を要しましたし、私にとってドイツ語と日本語を頭のなかで切り換えるのはなかなかエネルギーを要することだったので、それがひとまず報われたのは嬉しいことです。これから留学する予定で論文の投稿も考えている方には、何としても渡航前に一区切りつけることをお勧めします。

もう一つの知らせは東北関東大震災です。日本人留学生なら誰しも一度は、自分が海外にいる間に大地震が起きる可能性を考えたことがあるかもしれません。しかし実際にそれが起きてみると、私は軽いパニックに陥ってしまいました。もし日本にいる家族や友人に何か起きて、自分はすぐそこに行けないという現実を改めて突きつけられたからです。またそうした不安を煽るように、ドイツの報道では衝撃的な映像が繰り返し流されています。日本の状況がよくわからない焦燥感のなかで、私はインターネットやテレビの断片的な情報を追い求め、気づけば研究に手がつかなくなってしまいました。

ところが、当の家族や友人たちと連絡をとってみると私よりはよほど冷静で、「いいから博論を書け」とたしなめられてしまうことさえありました。大災害であることには変わりありませんが、その受け止め方や反応に関して、日本国内と海外のこうしたギャップに戸惑っている人は周囲を見ても私だけではなかったと思います。日本の状況は未だ予断を許さないように見えますし、私自身、状況によってはまた混乱することもあるでしょう。ただ、「博論を書け」という、ある意味当たり前の一言は、今でも私の中に響いています。自分が研究できる環境にいることに素直に感謝し、残りの留学期間も実り多いものにしていきたいと思います。

⁷軍事革命と「イタリア式築城」については、G・パーカー（大久保桂子訳）『長篠合戦の世界史—ヨーロッパ軍事革命の衝撃』同文館、1995年。